

土木学会四国支部「土木紀行」No.27(高知県)

『一斗俵の沈下橋』

「日本最後の清流」と呼ばれる四万十川。その魅力は、雄大な景観、多くの自然生物、田園風景など様々である。それらには「自然と人間との共生」が根本にあり、川を身近に感じられるということが、最大の魅力であるといえる。その中でも、「沈下橋」は特に川を身近に感じることができる存在として挙げられるだろう。流域に暮



写真1 四万十川

らす人々は沈下橋を通過して山や川へ出かけた。夏には子供たちが沈下橋の上から川に飛び込む。これらの風景は正に「自然と人間との共生」を映しているといえる。

沈下橋は、低水路・低水敷などの普段水が流れているところだけに架橋されており、床板も河川敷・高水敷の土地と同じ程度の高さとなっているため、増水時には水沈してしまう橋のことで、別名「潜り橋」や「流れ橋」とも呼ばれる。低い位置に架橋されることや架橋長が短いことから、建設費用は少なく済むが、増水時は橋として機能しなくなる。また、沈下橋には欄干がついていないことも特徴の一つである。これは、水没した際に流木や土砂が引っかかり、橋が破壊されたり、川の水が塞ぎ止められ洪水になることを防ぐためである。

沈下橋は建設費が安く抑えられるため山間部や過疎地などの比較的交通量の少ない地域で生活道路として多く作られたが、現在では山間部でも広い道路や本格的な橋が造られること、転落事故が絶えないことから、各地で次々と撤去された。しかし、高知県では「沈下橋は四万十川の特徴的な景観」となっていることが浸透してからは、沈下橋を生活文化遺産と捉え、逆に保存される存在となっている。

全国には400カ所もの沈下橋があるといわれており、高知県には国内で最も多い69ヶ所に沈下橋が存在している。そのうち、四万十川に架かっているものは21ヶ所あり、その中で最古のものは昭和10年に完成した、高知県四万十町（旧窪川町）米奥

にある「一斗俵（いっとひょう）沈下橋」である。（写真 2,3,4）鉄筋コンクリート製で、9連の橋、幅 2.5 メートル、全長 60.6 メートル、全体的にやや反っているほか、橋脚をまたいで架かる桁が中央部で厚いなど、沈下橋建設初期の形態を残しており、平成 12 年 12 月 4 日に国の登録有形文化財に指定されている。（写真 5）



写真 2 一斗俵沈下橋



写真 3 一斗俵沈下橋（全景）



写真 4 橋の上からの風景



写真 5 登録有形文化財の表示

沈下橋には他の橋に見られるような立派な欄干も無く、質素で無機質な色・形をしている。しかし、その形であるからこそ、自然を害することなくその中に溶け込むことができ、四万十川の景観の一部と成り得たのだ。

四万十川にお越しの際には、その雄大な自然と様々な生き物を、「沈下橋」と共にご覧になってみてはいかがでしょうか。

（高知高専専攻科建設工学専攻 2 年 吉岡秀高）